

定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解

平岡 宏一

はじめに

Guhyasamāja (以下 GS) の聖者流究竟次第 Pañcakrama (以下 PK) は、本来五次第であるが、これに定寂身を加えて 6 次第とする考え方が一般的である。この 6 次第のうち、前半 3 次第ではそれぞれ定寂身 (viveka-kāya)、定寂語 (viveka-vāc)、定寂心 (viveka-citta) が説かれている。これらは凡俗な身口意の状態を、密教的な修行によって克服していくことを目的とするものである。これらに幻身 (māyā-deha)、光明 (prabhāsvara)、双入 (yuganaddha) を加えて計 6 次第となる。今回問題とする三番目の定寂心では微細な心を顕明 (āloka)・増輝 (ābhāsa)・近得 (upalabdha) の三智に区別し、さらに、各々 33、40、7、計 80 の自性 (svabhāva) に分け、心の細かな様相を取り上げている⁽¹⁾。

さて、この PK について、プトンとツォンカパというチベットを代表する 2 大学匠の間では、その解釈に大きな開きがあることを既に報告してきた⁽²⁾。ここではこの定寂心についてのプトン、ツォンカパ両者の見解の違いを次の観点、即ち、

1. 定寂心と光明の違いについて
2. 三智 (顕明・増輝・近得) と 80 自性の関係について
3. 三智と「三空」〔空 (śūnya)・甚空 (atisūnya)・大空 (mahā-sūnya)〕の関係について

の以上 3 点より比較検討してみたい。

1. 定寂心と光明の違いについて

PK の心清浄次第 (定寂心) の中で「空と甚空と 第三大空と 第四一切空は 因果の差別においてである。」⁽³⁾、「顕明は空と・・・」⁽⁴⁾、「甚空は方便とともなうもので、増輝の顕現といわれる。」⁽⁵⁾、「顕現の取得は近得と、同様に円成実性と また 無明とされる。大空の語のこれらの別名は 勝者たちにより説かれた。」⁽⁶⁾などと三智 (顕明・増輝・近得) と三空 (空、甚空、大空) が説かれている。

さてこのように定寂心の段階で既に心の空性が問題とされている。しかしこの定寂心の次第で心の空性が説かれるとするならば、後の第五次第の光明において説かれる心の空性とその違いはどのように考えられたのだろうか。まずこれについて両者の主張を検証していこう。

—定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解—

(1) プトンの主張する定寂心と光明の相違点

心の法性を理解する智慧を修習する方法は後で、即ち光明の箇所を示す。ここで（定寂心）で問題とするのは有法（dharmin、法性〔空性〕という本質の基体としての心）を理解する智慧の修習の仕方である。（『赤註』⁽⁷⁾ 40.⁶⁻⁷）

プトンは光明の次第では心の法性即ち、空性を対象とし、定寂心の次第では心そのものを問題として区別している。この説は吉水千鶴子氏が指摘されたラクシュミーの説⁽⁸⁾、即ち光明を、心の光明と自性光明の二種類に分け、定寂心と光明の説が重複しないよう配慮した説に影響を受けていると思われる。

(2) ツォンカパの主張する定寂心と光明の相違点と反論

この説に対してツォンカパは次のように主張している。

定寂心を学びたい者は、心の本性を追求しなくてはならない理由として引用された3つのお言葉によって、心の真実性を理解しなくてはならないと（『行合集燈』（Caryāmelāpaka-pradīpa）に）示されている。それにより、チベット人とインド人のある者達の「定寂心の智慧は、有法（dharmin、法性〔空性〕という本質の属する基体）としての心を理解するものであって、心の（本質である）法性を理解するものではない。もし（心の本質を）理解するとするならば、光明と違いがなくなってしまう。」との主張を論破したのである。第四次第の光明の智慧は心の法性を直観的に理解するのであって、定寂心は法性を理解しても、直観的に理解するものとならないのなら、違いがないことにはならないのである。（『五次第の灯明』⁽⁹⁾ fols. 176b⁶~177a²）

ここでいう「チベット人の或る者とインド人のある者達」とはプトンとラクシュミーをさすと考えてよいだろう。ツォンカパは『行合集燈』の（定寂心を学ぶ者は）「自心の本性を追求すべきである。」（北京 No. 2668 fol. 85b⁴）などとする文を論拠にプトンたちの説を全面否定している。彼の説はプトンやラクシュミーの説とは異なり、定寂心と光明の兩次第において理解すべき空性は同じであるとする。そして定寂心と光明の違いは、理解すべき対象の性質ではなく、その理解の仕方にあると考えている。つまり定寂心では心の空性を単に共相（イメージ）で理解し、光明の段階ではさらに進んで直観的に理解しているのである。このようにツォンカパの説と、プトンやラクシュミーの説とはどちらも定寂心と光明とを区別しているとはいえ、その区別の仕方には大きな違いを見いだすことができる。ただツォンカパの説については、『行合集燈』では、「定寂心を学ぶ者は、心の本性を追求しなくてはならない」との趣旨を示しているのみで、定寂心と光明との具体的差異には言及していない。従ってその違いを空性の理解の仕方にあるとするのはツォンカパ独自の説と考えられよう。

2. 三智（顕明・増輝・近得）と 80 自性の関係について

また PK では「顕明は空と般若と心と 依他起性であって、今 その自性の明らかなる遍満をよく解釈しよう。」⁽¹⁰⁾とあり、様々な 33 の心の働きが述べられている。同様に増輝と、その自性としての 40 の心の働き⁽¹¹⁾、近得と、その自性としての 7 つの心の働き⁽¹²⁾が原文には説かれている。

さて次にこの自性とはいかなる存在と定義しているのか、またこの自性と三智（顕明・増輝・近得）の関係はどうか等についてもプトンとツォンカパでは見解が大きく違っている。これについて以下考察してみたい。

(1) 三智（顕明・増輝・近得）の生起と自性の消滅についてのプトンの主張

プトンは三智（顕明・増輝・近得）の生起の仕方について次のように述べている。

（前略）第一刹那に「顕明」の智慧を実現してから 33 自性（の分別）を滅する。第二刹那に「増輝」の智慧を現して 40 自性（の分別）を滅する。第三刹那に「近得」の智慧を実現してから 7 自性（の分別）を滅するのである。（後略）（『赤註』40.⁷~41.²）

このようにプトンは三心の生起と、その自性の消滅は同時に実現するとしている。この説についてはインドの学匠たちにも類似の説を見いだすことができる。例えば、ラクシュミーは「（前略）自性を知ってから属性（'khor）を伴う第一の意識が浄化したならば、その時空性たる顕明の智慧を顕現するものとなる」⁽¹³⁾と述べており、またナーガボーディが「その時顕明の智慧が生起したならば、空性の真実性を得たゆえに（六）識の 33 の自性をともなうものが滅する」など⁽¹⁴⁾としている。三智（顕明・増輝・近得）の生起がそれぞれの自性の消滅をともなうとする説はこのようにプトン独自のものではなく、インド以来の伝統的な説であったようである。

(2) 「自性」についてのプトンの認識

次に「自性」という言葉をプトンはどんなものとしてとらえていたのか考察してみよう。プトンは次のように述べている。

即ち、第一の顕明の属性として“離欲”などの 33 の自性、増輝の属性として“貪欲”など 40 の自性、近得の属性として“中間的な欲”などの 7 の自性を生ずるのである。（『赤註』40.⁵~⁶）

ここでプトンは「自性」を三智（顕明・増輝・近得）の“属性”（'khor）と述べていることから、三智（顕明・増輝・近得）と自性の関係は、三智を心王、自性を心所と規定していたと思われる。つまり顕明が心王で 33 の自性を心所、増輝が心王で 40 自性が心所、近得が心王で 7 自性が心所とする関係である。ちなみにラクシュミーは「この諸自性は般若智の我性である。これらは心所の法を示す」⁽¹⁵⁾と述べているが、おそらくプトンもこの説に因ったのだろう。

(3) 三智（顕明・増輝・近得）の生起と自性の消滅についてのツォンカパの主張と反論

まず本題に入る前に、風 (rlun) と意識の関係について述べてみたい。吉水千鶴子氏は「風とは更に微細な分別で、pr. (Prakṛti) に到るまで完全に滅することはない。」⁽¹⁶⁾と述べ、“風”を微細な分別とし、「80の Prakṛti が滅しても、風が滅しなければ三空の区別があり、風も滅すれば Pr.が顕現する」(同上)と解釈している。しかしこれは風を分別と誤認しているように思われる。風と意識との関係についてはPKの中で「諸有情の生命となった 風 (vāyu) と名付けられたものは、一切事業をなすものなり。これは意識の乗物であって」⁽¹⁷⁾と述べられている。また、ナーガボーディはこれについて「『これは意識の乗物であって』という場合の『これ』とは風であって、実際には風に意識が乗って境界の認識をなすのである。」⁽¹⁸⁾と注釈している。またヴィールヤバドラも次のように述べている。「(前略)『意識』即ち、その心がその(風の) 乗り手というのは、馬車と(馬車)に人が乗るようなものであって、以下のように説かれたのである。(それは) 風という乗物に意識は乗って、すべての所作をなすという意味である。」⁽¹⁹⁾

さてプトンも「風を馬のように帰順させて、心は人のように自分の力でたずなを引く」(『赤註』39⁴)と述べていることから、風は乗物、意識はその乗り手で、両者が一体となっはじめてものの認識が可能という考え方はインド以来の、PK 学習のための共通認識であったことが理解できよう。

次に本題に戻り、ツォンカパが三智（顕明・増輝・近得）の生起と自性の消滅の関係をどう考えていたのかを考察したい。

ツォンカパは、以上のような風と意識の認識に基づいて次のように述べている。

アーリヤデーバの『自身加持次第差別』(北京 No. 2670) には「(前略) 風は心に溶けるものとなる。(後略)」と、心、(即ち) “顕明” を生起する前に、風は溶けると説かれている。その場合の風とは、(80 自性の) 分別(という心の働き)を動かす風であるから、その時に(乗物の風が溶けるならば、乗り手の) 分別もまた溶けなくてはならないし、顕明と(80) 自性(の分別)の2者は、(その意識の粗・細の状態が) はなはだ異なっているのである。(光明より逆行して意識を生起する場合においても、(釈タントラ) Vajrajñāna-samuccaya [智金剛集] (北京 No. 83) には3つの“顕現”⁽²⁰⁾(顕明・増輝・近得)が生起してから(80) 自性の分別を生起すると説かれている。』(『五次第の灯明』 fols. 189b⁵~190a²)

ここではツォンカパはアーリヤデーバの『自身加持次第差別』(北京 No. 2670) の「風心に溶けるものとなる。」というセンテンスを論拠として、この場合の風とは80 自性の心の働きを動かす風をさすのであるから、その場合風が消滅すると、同時にその風に乗っている80 自性の心の働きも消滅せねばならない。そして顕明が生起する前に、80 自性の分別は全て消滅しなくてはならないことになる。そもそも80 自性は粗い意識であり、三智(顕明・増輝・近得)は微細な意識であるから粗い意識と微細な意識が同時に生起することはあり得ないとしている⁽²¹⁾。

—定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解—

(4) 「自性」についてのツォンカパの認識

次にツォンカパの「自性」という言葉の認識について考察してみよう。ツォンカパは次のように述べている。

それゆえ、諸々の分別を諸“顕現”（顕明・増輝・近得）の“自性”と説いたのは「特徴」をいうのである。それは先に3つの“顕現”（顕明・増輝・近得）の特徴を述べたように本性が別ではないのではなく、（屋根の）鳥の置物が素晴らしい家を象徴するように本性が別の特徴付けるものを特徴と説かれたのである。それはまた『行合集燈』に「同様に顕明の意識も（外に現れた）姿はない。しかし貪欲と離欲と中間的な欲等の諸自性より推察すべきである。」と、自性によって“顕現”（顕明・増輝・近得のどれが原因となって生じたものか）を推察すると説かれている。それゆえ“顕現”（顕明・増輝・近得）を特徴付けるものなのである。

推察の仕方は（80）自性の分別には力の強・弱・中（の違い）が見られるから、それら（の意識）を生起させている“顕現”（風に乗った顕明・増輝・近得）にもまた動きの強・弱・中（の違い）があると推察できるのである。そうであるなら力の弱い7つの分別のいずれかであるなら、（原因となる）風に乗る“顕現”の動きが弱い証拠である。従って“近得”の果であるとしてすることができる。他の2つについてもその理屈が応用できるのである。

（『五次第の灯明』 fols. 190b³～191a²）

ここでツォンカパは「諸々の分別が3つの“顕現”（顕明・増輝・近得）の自性と説いたのは特徴（mtshan ñid）をいう」とし、その「特徴」とは屋根の鳥の置物が豪華な家を象徴するように屋根の鳥の置物と、それによって象徴される豪華な家のように本性が別であるような関係としている。このようにわざわざ「本性が別」と断っているのは、プトンらが主張している心王と心所のような同一本性の関係ではないことを示していると思われる。ツォンカパは『行合集燈』を論拠に「自性」とは、あくまで三心のどれが原因となって生じたものかを推論するための目印的な意味合いのものとしている。そして80 自性の分別の乗り物である風の動きを強・中・弱に分け、同様にその乗り物である風が強・中・弱の関係にある顕明・増輝・近得の三智のいずれを原因に生じたものか推察しうると考えたのである。

さてツォンカパは、この説の論拠を『行合集燈』に見いだしている。しかし『行合集燈』には「諸自性より推察すべき」とはあるが、その際に風の強弱を論拠とせよとは直接説かれていない。この箇所の前段の譬えで風は姿がなくとも、炎などを揺らすことでその存在を認識することができるが述べられているが⁽²²⁾、この譬えだけから、ツォンカパの解釈を導き出すのは困難であり、やはりあくまでこれもツォンカパ独自の解釈といえる。

(5) ツォンカパによるプトンを含む旧来の説への批判

次にこのような立場からのツォンカパによるプトンを含む旧来の説への批判について考察してみよう。

それゆえ、「前者が後者に溶ける」というのは、前者の力が衰えて不明瞭になった時、（後

——定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解——

者の力がはっきりして）後者に力が移動したような感じになるので、そのように（前者が後者に溶けると）言っただけである。従って溶ける場合に最初に 30 の自性（の分別）が無くなり、次に顕明が生起する。その後、40 の自性（の分別）が無くなり、次に増輝が生起すると主張すること、またそのように主張しながら、（各々の）自性（の分別）と現れ（顕明・増輝・近得）が“相応”であると主張すること、生起の場合に最初に近得が生起し、次に 7 の自性（の分別）を生起するなどと言うのは不合理で、矛盾ばかり言うことである。」（『五次第の灯明』 fols. 190a⁶~190b²）

ここでの批判は三智と自性が“心王”と“心所”とした場合、心王と心所は生起・消滅の時を同じくする“相応”の関係にある筈であるが、そのように主張しながら、顕明と 33 の自性、増輝と 40 の自性、近得と 7 自性が、それぞれ同時に生起し、また同時に消滅しないのは矛盾であるとの主張であろう。このようにここでもプトンとツォンカパの説とは大きく異なるばかりか、ツォンカパはプトンの説を批判しているように見える。

3. 三智と「三空」の関係について

最後に両者の三智と「三空」の関係についての両者の主張を比較してみたい。

(1) プトンの主張

まずプトンの主張から考察していこう。彼の主張は次のようなものである。

（前略）最初に粗い状態で顕現するのは、「顕明」の智慧で、その法性は「空」である。それがさらに細かくははっきりと顕現するのが「増輝」の智慧で、その法性が「甚空」である。次に顕現したものが滅する直前が「近得」で、その法性が「大空」である。（『赤註』41.⁵~⁶）

プトンは顕明の法性を空とするなど三智の法性をそれぞれ空、甚空、大空とする解釈をとっている。ナーガボーディ⁽²³⁾やラクシュミー⁽²⁴⁾は「三智」をそのまま「三空」とする説をとっており、この解釈は極めて特徴的な解釈であると言える。プトンとしては先に「心の法性を理解する智慧を修習する方法は後で（光明の箇所）で示す。ここで（定寂心）で問題とするのは有法を理解する智慧の修習の仕方である。」と定義した手前、三智をそのまま空性を理解する智慧と定義すると矛盾が生ずると考え、このような特殊な解釈をほどこしたのであろうか。

(2) ツォンカパの反論と主張

これに対し、ツォンカパは次のように反論している。

「三空とは、3つの“顕現”（顕明・増輝・近得）の法性を言うのであって、3つの“顕現”（顕明・増輝・近得）を言うのではない。」というのもまた不適當である。『行合集燈』には3つの“顕現”（顕明・増輝・近得）自体が三空だと説いている。またそのことは『智金剛集』にも明らかである。（『五次第の灯明』 fol. 182b⁵）

—定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解—

このようにツォンカパはプトンの説を否定し、「三智」をそのまま「三空」と主張している。これは表面的には旧来の説と同様のものに見える。しかしその解釈は旧来の主張と異質である。

まずラクシュミーは「空はそれ自体(33の)自性による自性の空として、不可得」(北京 No. 2705, fol. 444a⁵)をいうとし、また「甚空は 40 自性が不可得の故」(同 445b³)、「大空は特徴づけがたい 7 自性が不可得の故」(同 447a⁴)としている。またナーガボーディは「(前略) 所治の側としては 3 つの意識(前六識、末那識、阿頼耶識)と、それより生じた自性の 3 つの相であり、対治の側は三空であって、それ自体の別名(paryāya)は三智である。」(北京 No. 2697, fols. 87a⁷~⁸)として、三空が前六識、末那識、阿頼耶識の三つの意識と、その属性としての 80 の自性を浄化する対治であると定義している。このようにこれらの説は先の項目で指摘したように、三智(顕明・増輝・近得)とそれぞれの自性とが心王と心所の関係にあることを前提とし、また三空の“空”は空性を意味している。

さてこれらの説に対し、ツォンカパは三空=三智の関係を考察してみよう。ツォンカパは次のように説明している。

分別を動かす風(rluñ)が消滅し、月光の如く照らすことから“顕明”と言われる。それは 80 の分別をともなったものとして空であるから「空」であるのだ。日光のように(顕明と比較して)ずっと明るいことから“増輝”であり、風とともなう“顕明”について空であるから「甚空」である。黄昏時の暗さの如く不鮮明に顕現し、光明が近づいているので、“顕現”の“近得”である。風とともなう増輝として空であるから「大空」である。(『五次第の明照』 fols. 182b⁶~183a²)

このようにあくまでもツォンカパは“顕明”では 80 分別が消滅したがゆえに、「空」、「増輝」では“顕明”が消滅したがゆえに「甚空」などとそれぞれ前段の意識が消滅したことをさし、「空」と定義しているのである。ツォンカパは「(前略) 定寂心は、心の真実性を理解するために生起するのであるから、四空はいずれの場合も楽と空を結合するのである。」(『五次第の明照』 fols. 202a¹~²)と述べ、定寂心の三空を、「空性」を認識する智慧とは定義している。しかし、この引用箇所直ぐ後で、「三智の楽と、空を結合しなければ、無我は不可得である。つまり戲論を離れた相(空性)が現れない故に、白赤黒の 3 つの顕現だけが現れるのである。」(同 fols. 202a²~³)としている。これは三智で、空性を認識しない場合もあることを意味している。三智=三空と定義しているのであるから、空性を認識しない三智、即ち三空がここで想定されていることが分かる。このことに関連してツォンカパは「微細な呼吸も絶って中央脈管に(風が)溶け込んでおこる四空がそっくりそのまま寝る場合の基時においてあるわけではない。しかし四空がないのではない。」(五次第の明照 fols. 330a¹~²)と述べて、寝る場合、すべての人に四空が現れるとの認識を示している。ちなみにパンチェン・ラマ 1 世ロサン=チョゲルは「このような三智は基時(修道の入る以前の一般の人々の場合)では死の時に完全な(三智)が出現するのである。」(大谷 No. 10370, fol. 46b²)として、修道の入る以前の一般の人々の場合にも臨終に際しては三智が出現するとしている。ゲルク派の場合、三空は死に至る者には誰にでも訪れるものとされているようである⁽²⁵⁾。

——定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解——

したがってツォンカパの想定していた三空の“空”は、空性を意味せず、直前の意識の消滅のみを意味すると思われる。

さて、ツォンカパが論拠として挙げた『行合集燈』と、『智金剛集』では、三智が三空とイコールの関係であることは示唆されているが⁽²⁶⁾、彼の主張するような三空の意味を読み取ることはできず、この三空の定義付けもツォンカパ独自の説であると考えられる。

結び

ツォンカパはプトンの名こそあげていないが、その主張を厳しく批判しているようにさえとれる。プトンの説はラクシュミーなどの影響を強く受けており、どちらかといえば伝統的な説をそのまま踏襲していると思われる。

一方ツォンカパは『行合集燈』を自説の典拠としてよく用いている。しかし、その論拠となっている典籍にツォンカパの主張と同じ趣旨が具体的に述べられているわけではなく、あくまでも自説を論証する際の援用材料として用いているに過ぎない。ツォンカパの場合には、特定の誰かの影響というよりは、彼独自の論理性を機軸に据えてすべての論を展開し、必要に応じて伝統的な書物を用いて権威付けを行っているような印象を受ける。

以上のようにプトンとツォンカパは、同じ聖者流に属してはいるが、この定寂心次第においてもその解釈は大きく異なるものであったことが分かる。

注

- (1) 酒井真典『修訂増補・チベット密教教理の研究（一）』P. 34～45 参照 国書刊行会 1956 年)
- (2) 『定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解』日本西藏学会会報第 40 号, 『幻身についてのプトン・ツォンカパの見解 (1)——鏡の影像の譬えをめぐる——』印仏研 第 43 巻第 1 号, 『ツォンカパの定義した浄・不浄の幻身について』密教文化 第 193 号
- (3) *Pañcakrama : Sanskrit and Tibetan Texts*, Critically Edited with Verve Index and Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts by Katsumi Mimaki and Toru tomambechi (以下略号「PK」) 文段番号 4
- (4) 「PK」II. *Sarvasuddhivuddhikrama* 文段番号 7
- (5) 「PK」 同上 文段番号 15
- (6) 「PK」 同上 文段番号 23
- (7) *dPal gsañ ba 'dus pa'i rdzogs rim rim lña'i dmar khrid kyi man riag yid bzin nor bu rin po che'i za ma tog* by Bu ston. *Collected Works of Bu ston*, vol. X, pp. 25～66. (以下略号「赤註」とする。東北 No. 5082)
- (8) 吉水千鶴子「*Pañcakrama* における三智・三空と *prabhāvara* ——タントラ仏教における空性理解の問題点——」p. 457 『仏教思想論集 II』成田山仏教研究所、1988 年)
- (9) *rGyud kyi rgyal po dpal gsañ ba 'dus pa'i man riag rim pa lña rab tu gsal ba'i sgron me* by Tson kha pa. (以下略号「五次第の灯明」とする。東北 No. 5302)
- (10) 「PK」 同上 文段番号 15
- (11) 「PK」 同上 文段番号 23

—定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解—

- (12) 「PK」 同上 文段番号 24
- (13) 北京 No. 2705, fol. 442b⁸
- (14) 北京 No. 2697, fols. 88b³~⁴
- (15) 北京 No. 2705, fol. 444b³
- (16) 吉水千鶴子、前掲論文、p. 462
- (17) 「PK」 I Vajrajapakrama 文段番号 3
- (18) 北京 No. 2702 fols. 291b⁷~⁸
- (19) 北京 No. 2699 fols. 214a²~³
- (20) ここで *snan ba* は顕明をさす場合と、三智全体をさす場合があるため、三心全体をさす場合は“顕現”と訳すこととした。この三智全体を示す場合の *snan ba* の訳については、「輝き」という訳を当てているケースもある。しかしこの場合の *snan ba* は、近得も含まねばならず、暗黒の光景に心を満たしたり、卒倒したような状態を“輝き”と訳するのは不適當と考えたため、一応ここでは“顕現”という訳を用いた。
- (21) パンチェン=ロサン=チョゲルはこれについて次のように明確に述べてツォンカパの説を補完している。
- 或る者が“顕現”（顕明・増輝・近得）と諸々の自性が混合して生起したり、溶けたりすると主張するのは不合理である。粗い知（意識）と微細な知（意識）が混合したり生起したりすることはあり得ないからである。それゆえ（知・意識）が生起する際には諸々の“顕現”（顕明・増輝・近得）が生起した後に諸自性が生起し、諸々の自性が溶けた後に諸々の“顕現”（顕明・増輝・近得）が溶けるのである。（それは意識が）生起する際には知（意識）は微細な状態から粗い状態になっていくからであり、（知（意識））が溶ける際には粗い意識から次第に微細な状態へと移っていくからである。（『五次第の真髓』大谷 No. 10370, fols. 48a⁶~b²）
- (22) 北京 No. 2668, fols. 89b⁴~⁵
- (23) ナーガボーディは「空自体が顕明の智慧である。甚空自体が増輝の智慧である。大空は近得智である。」（北京 No. 2702, fol. 304b¹）としている。
- (24) ラクシュミーは三空と三智について次のように述べている。
- （前略）自性を知ってから、属性を伴う第一の意識を浄化するならば、その時「空性」たる「顕明」の意識を現すものとなる。同様に属性を伴う第二の意識を浄化するならば、その時「甚空」たる「増輝」の意識を現すものとなる。同じ様に属性を伴う第三の意識を浄化するならば、その時「大空」たる「近得」の意識を現すものとなる。これら3つの意識を不可得の時、（それは）第四番目の一切空であって、心の光明を現すものとなる。（北京 No. 2705, fols. 442b⁸~443a³）
- (25) これに関連してヤンチェン=ガロは一般の人々が臨終に際し、経験する四空が「空性」を認識しないものであることについて、次のように述べている。「四空の場合、対象のヴィジョンを伴う前の智より、対象のヴィジョンを伴う後の智へだんだん微細になっていく。そのため、意識には粗い世俗の顕現がなくなり、晴朗なヴィジョンが心に現れるのであるが、空性を認識対象とするのではない。それゆえ、修道をしていない凡人にはそれらの場合（臨終に際し、様々な光景が心に現れる場合）、実体のある存在のみが（心に現れ、）実体の存在を否定する空性は）心に現れることはない。この場合（修道をしていない凡人）の四空はどれも臨終の際しては誰にでも現れるのである。従って臨終に際し、空性を通達するのであれば、（誰でも死ぬだけで）努力することなく、解脱することになってしまうであろう。」（『基本の三身の構造をよく明らかにする灯明』東北 No. 6600, fols. 9b⁶~10a⁴）
- (26) 「行合集燈」では「般若と空の智慧は月の如き空性のみである。方便の智慧もまた太陽が顕現する如くであり、甚空の性質のみである。同様に顕現の近得智は暗黒のごときで、大空の特徴である。」（北京 No. 2668 fols. 89a⁷~⁸）とある。また智金剛集（北京 No. 83）には「（それは）無明といわれるものと、顕現の近得と大空である。」（fol. 290b⁶）、「それは顕現の増輝と甚空と説かれた。」

——定寂心についてのプトン・ツォンカパの見解——

(fol. 290b⁷)「それは顕明と空である。」(fol. 290b⁷)とあり、三空と三智は相応関係にあることが示唆されている。